

目つぶし阿弥陀

昔、金沢村に宝樹院というお寺がありました。

お坊様はあるとき、お寺を若いお坊様に頼んで旅をしていました。

ある日、漁村を通りかかりますと何か変です。とても良いお天気なのに、村人が漁に出いていません。そればかりか、人の姿も見えません。不思議に思っ歩いて行くと、どこからか村人たちの声が聞こえてきました。声の方に行ってみると、どうやら集まって何やら相談しているようです。

お坊様は「これこれ、みんなそろってたいそうお困りの様子じゃが・・・」と言いながら、村人に近づくと、思わず「はっ」と息をのみました。お坊様の声に振り返った村人たちは、みんな目が見えないのです。

「そうか、それで海に誰もいなかったのか。それにしても村人たちみんなの目が見えないとは何か訳があるに違いない。悪い目の病気でも流行っているのだろうか？——」と思ひ、訳をたずねました。

一人の村人が言いました。「実は2日程前、いつものように海で漁をして、帰ろうと海辺を歩いていたら、遠くの方から何やら大きな物が流れてきました。『大きな魚じゃなあ。よし、あれを捕まえて今日の土産にしよう。きつとみんなが驚くじやろう。』とワクワクしながら待っていたが、近づいてきて驚いた。なんと、この辺では見たことのない大きくて立派な仏様じゃった。海からヨイシヨ！ヨイシヨ！と引き上げたんじゃが・・・」

他の村人たちも口々に言った。

「海から上げた途端、仏様の目からもものすごい光が出てきた」

「この間の嵐の雷さんの何倍もすごい光で、みんな目が眩んだ」

「不思議なことがあるもんじやと、おっかなびつくり目を開け



てみると、真まつ暗くらで何も見えねえだ。仏様を見た者はみんな目が見えなくなってしまっただ。」

「いや、そればかりじゃねえ。話を聞きつけて集まった他の者も、よせばいいのに見ちまったもんで、このとおりみんな目が見えなくなってしまっただ。」

「これでは、漁りようをすることも、畑たがやを耕かすことも何にもできねえ。これからどうしたらいいかと、相談そうだんしているところすだ。」と見えない目をむけて、口々くちぐちにお坊様ほうさまに言いました。

この話を聞いたお坊様は、「仏様は人々の幸せを願ねがうはずなのにきつと何か訳わけがあるに違ちがいがない。それにしても早く何とかして、村人達を助けなければ」と思い、大きな仏様の体中からだじゆうにお経きようを書いた沢山のお札ふだを貼り、一心いっしんにお祈いのりをする、不思議ふしぎなことに村人たちの目が見えるようになりました。

その時どこからか、お坊様の心に低ひくい厳おこかな声が聞こえてきました。「私は阿弥陀如来あみだによらいです。ひたすら人々の幸せを願ねがってきたが、あちらこちらと人手ひとでに渡わたり、ゆっくり心を落ち着ける事が出来ず、すっかり疲つかれてしまった。しかし、お前まへの心からのお経きように私の心も十分に慰なぐさめられた。ありがとう。」

その後、村人達の手で、大事に運ばれた阿弥陀如来あみだによらい様は、今でも大道だいどうの宝樹院ほうじゆいんに大切に祀まつられているそうです。

阿弥陀様あみださまでも人間のように心のゆらぐ時があるのでしょうか。それにしても『心からの祈いのり』は仏様の心さえないやす力があるのですね。



文 氏家 總子（ふさこ）
絵 小泉 喜久江（きくえ）